翻訳

V．コンスタンディノス
『屈従列伝』

橘　孝司

輝く島々と碧色のエーゲ海、異邦人の歓待を無上の喜びとする陽気な人々といったイメージが圧倒的な国ギリシャ。しかし、人間が集まって組織を作り、社会を形成し、生活を営んでいく以上、様々な問題を抱え込むことになるのは他の国と変わらない。

詩集『屈従列伝[1]』の中で、詩人V．コンスタンディノスは、日々の生活に汲々として、自由に生きることが出来ず、他人への屈従を強いられている人々の生活を我々に垣間見させてくれる。

畏怖との対話[2]

もし君が
豪華で居心地のよい事務所を
訪れて
厳粛な紳士達が
優雅に着飾っているのを目にするとしよう

たとえ彼らしかいなくとも、
快く応対してくれそうであっても、
間違っても彼らの邪魔をすることなかれ。
たいていの場合が
畏怖と言葉を交わしているのだから。

彼らに近づくことなかれ、
君の方へは目もくれない。
彼らに話しかけることなかれ、
君には耳も傾けぬ。

彼らの相手は
名高き御方なのだから。

鎧戸のない窓[3]

人々が固まり住まう団地では
-たいていは経済的な理由で-
窓は鎧戸を持たない
あるのはただ内側のガラス戸だけ、
光を通さぬプラスチックの覆い。

そして住まう人たちは
さまざまな観葉植物やら
白いレースのカーテンで
窓を飾ろうとするのだけれど、
強い日射しや眩い光から
身を護ろうとする度に
闇の中に閉ざされてしまう。

V．コンスタンディノス　B.Κωνσταντίνος（本名コンスタンディノス・ヴァシス Κωνσταντίνος Βάσσης ）は、現在在日ギリシャ大使。1931 年アテネに生まれる。アテネ大学法学部を卒業した後、1959 年に外務省に入り、外交官としての経歴が始まった。エリザベトビル、ブダペスト、ヴェニス、フランクフルト、ジェッダ、メキシコシティーの領事館・大使館に勤め、1990 年に日本のギリシャ大使に任じられた。創作活動としては、1972 年に詩集『屈折』Διαθλάσεις を出版して以来、三つの詩集（『屈従列伝』Βίοι Ἑπάλληλοι(1977)、『問題ある組立』Προβληματική Συναρμολόγησις(1981)、『不可入性の法則』Ὁ Νόμος τοῦ Ἀδιαχωρήτου (1990) ）と二つの短編集（『直角の下』Ἑπὸ Γωνίαν 90°(1976)、『真夜中の謎』 Τὸ Αἴνιγμα τοῦ Μεσονικτίου(1989)）を発表している。このうち、『真夜中の謎』で 1989 年度の国立文学賞短編部門（Κρατικό Λογοτεχνικό Βραβείο Διηγήματος)を受賞した。雑誌 Νέα Πορεία、Ηυθύνη 等にも多数の寄稿があり、Νέα Πορεία 37 号（pp.111-128)には「ラフカディオ・ハーン、ギリシャ=アイルランド系

の日本びいきのアメリカ人作家」が掲載されている。

ここで紹介している『屈従列伝』は二つ目の詩集であり、「革命家」「大きな事務所の小さな人々」「悪魔との取引」等、いずれも一頁に収まる短詩44編を収める。 題名は、プルタルコスの『対比列伝』 Πλούταρχος, Βίοι Παράλληλοιのもじりである。

書きながら書き写しながら(4)

黒く分厚い書籍が
壁面を覆いつくした
暗く冷たい部屋の中で、
乙女らは老いてゆく
書きながら書き写しながら、
今まで甲斐なく探してきたものを
いつかその目に出来ようと、
誰をも夢想へ駆り立てる
熱情を抑えられぬまま。

かくて彼女らは限りない細部まで
読みつづけ、聞きつづける
その選り抜きの楽しみと
ありあまる想いとは
しかし許されざる類のもの。
それゆえに、どれほど惹かれようとも、
一度として知ることはなく、
淡淡と語っては、後になって
ひとり思いを遙らすのが
彼女らの常。

テロリスト(5)

警戒警戒、
テロリストが我らの間を徘徊中、
もはや恐々とすることなく、

姿を変えることもなく。

潔白の身となって、
壮麗なる建物に居を構え
取り組むのは礼儀の問題。

警戒警戒、
うわべだけの活動ならば
明日は我らもテロリスト。

コンスタンディノス自身、最も影響を受けた詩人はK．カヴァフィス、作家ではF．カフカとG．オーウェルである、と述べている[6]。上に掲げた「鎧戸のない窓」からはカヴァフィスの「窓」が連想されるかもしれないし（「窓」よりもずっと具体的であるが）、次の「他人」も、幾分カフカ的モチーフを含んでいるように思われる。

他人[7]

ある日、遊びから、
あるいは仕事から、
帰って来ると、
思いがけずも他人が
越して来て動こうとしないのを見た。

どうしてこうなったのか、
私たちの止むを得ぬ不在に
つけ入ったのか、それとも
どのようであれ、来ることになっていたのか？

そんな思いを巡らしても無意味。
本人だって答えられない
自分が何者なのかすら答えられなかったのだから。

しかし、コンスタンディノスの詩が持つ現世の屈従生活に対する告発は、カヴァフィスの詩の憂鬱よりもっと強烈にして直接的である。「人間的弱さに

とらわれてしまうと、屈従的で、他者に依存した、場合によっては価値のない生活を送ることになる[8]。」 カヴァフィスのように歴史の一場面を借りて語ることはない。彼が冷徹な目を注ぎ続けるのは、現実の世界、現代のギリシャである。

奇妙な都市造り[9]

都市造りの名手たちの
後裔が住まう土地には
通りに舗道なく、
家には暖炉に代えてくぼみがあり、
寺院の周囲は下着が干され、
庭園は無用のものと避けられる、
そして大邸宅のバルコニーは
演説に役立つだけ。

どの街に行こうと目にするだろう、
オフィスの外は燃えていて
中では皆が歌い踊っているのを。

折衝[10]

あるいは大きく、あるいは小さな
折衝が、
押し黙り、忍耐強く
夜昼、冬も夏も
私たちの家の外で待っている。

朝私たちが出かける時、
誰も彼もが門の側にいて、
笑顔で挨拶をしながら
私たちの職場まで
慎ましく付いて来る。
仕事が終ると、

出口の傍らに現れ、
恭しく私たちを迎えては
あとに付き従う。

何週も、何月も、何年も、
日射しの下、雪の降る中、
窓から彼らを見やる度、
いつでも彼らは見張っている。

が、彼らを憐れみ
幾人かを招き入れる度、
翌日は他の者たちがその空席を埋めていた。

墓地と霊園(11)

特別な部局により、
常に整然と管理されている
軍人墓地の中で
他に交じって、
名を刻まれることなく
あるのは階級と日付と一言
《祖国ノ為勇敢ニ戦ヒテ没ス》
そんな大理石の、あるいはただの石の十字架を
目にする度に
報われざる死者達よ、と思っていた。

しかし中央欧州で見たのは、
幾つかの墓地で、
壮大な霊廟の彼方に
一つ所に集められた、
何十何百の同じ様な
苔生してしまったただの石板、
すべて同じ日付
ひとつ書かれた文字は《名もなき人々の墓》

同じ日に爆撃で
倒れた人々がねむる故。
あるいは、ユダヤの古い霊園を訪れた時、
流麗な墓石には
聖書からの言葉が刻まれていたけれど、
間近に見ることは出来なかった、
草の中に埋もれていたので。

その時分かったのだ
軍人墓地の整然とした十字架の中に葬られた人々は
何と幸せだろうか、と。

これらの詩の素材は、アテネの街角で見かけるものであったり、あるいは外交官としての異国生活から採られたものであろう。「私が作品の中で取り扱うテーマは、一方では、死、時、愛といった根本的なものであり、他方では、今日のギリシャの社会・政治の現実や私の個人的な仕事上の経験から感じ取れるような人間の弱さである(12)。」これらの詩を貫くペシミスティックな傾向を最も簡潔に示しているのは次の作品である。

死を待ちながら(12)

朝急いで出かけ、
昼間疲れきって帰り、
午後コーヒーを楽しむ
新聞を読みふけりながら、
夕方映画館で、喫茶店で、
楽しみを見いだし、
夜抱擁し合い、
かくして待ち続ける、待ち続ける。

最後に詩人の言語について一言しておきたい。基本的には、民衆語(Δημοτική)で書かれているが、ときおり、純正語(Καθαρεύουσα)の形態が含まれている。例えば、αἱ, των, εἰς, ἄνευ, ὑπὸ, ἦσαν, ἐπὶ τούτῳ, συνεργάται など。このような言語的特徴が、作品内容と深い関わりを持っている点を Γ.Βέης は、

『真夜中の謎』の書評の中で指摘している。「V．コンスタンディノスの言語は折衷的で異端風であり、純粋の民衆語と並んで、下書きのイオタのない、機能面のみの与格や、かなりの古代ギリシャ語の形態が含まれているが、これらは、並外れて脆く追従的な主人公達のコミュニケーションの程度がゼロであるのを示すのに成功している[14]。」

註

(1)Β.Κωνσταντίνος, *Βίοι Ἐπάλληλοι*.1977, Εκδόσεις Νέας Πορείας, Θεσσαλονίκη.

(2)Ibid.p.12,"Συνδιαλέξεις μὲ τὸν φόβο"

(3)Ibid.p.35,"Παράθυρα χωρὶς ἐξώφυλλα"

(4)Ibid.p.37,"Γράφοντας κι' ἀντιγράφοντας"

(5)Ibid.p.11,"Οἱ τρομοκράτεις"

(6)1991 年 12 月 12 日付の筆者宛の書簡の中で。カフカ、オーウェルとの共通点は、Γ.Βέης による『真夜中の謎』の書評中でも指摘されている。(Γ.Βέης, "Επιλογή" *Διαβάζω*.No.250/14-11-90,p.87.)

(7)Β.Κωνσταντίνος,op.cit.p.26,"Οἱ ἄλλοι"

(8)上記の書簡の中で。

(9)Β.Κωνσταντίνος,op.cit.p.21,"Παράξενη πολεοδομία"

(10)Ibid.p.22,"Οἱ συμβιβασμοὶ"

(11)Ibid.p.38,"Νεκροταφεῖα καὶ κοιμητήρια"

(12)上記の書簡の中で。

(13)Β.Κωνσταντίνος,op.cit.p.36,"Περιμένοντας τὸν θάνατο"

(14)Γ.Βέης,loc.cit.

（本稿を作成するに当り、V．コンスタンディノス（K．ヴァシス）氏は、日本語訳を快く認めて下さった上、詩集を初めとして、多くの重要な資料を送って下さった。心より御礼申し上げたい。）